

学校教育目標		共に未来を築く、心豊かで、かしく、たくましい子どもの育成		重点目標	考えて、考えて、考え抜く子どもの育成										
評価計画				自己評価		学校関係者評価	改善計画								
重点目標	目標達成のための方策(取組指標)	成果指標	評価	結果(成果○と課題△)		コメント	次年度における改善策(案)								
重点目標に関する評価	1 学力向上 「かしこい子」の育成 頭:最後まで話を聴き、見方・考え方を働かせる子ども	主体的な学習するために、導入段階に意欲を高める工夫を行い、学習のめあてを意識しながら学習を行うことができるようにする。	児童による授業評価: 「授業で「何を学んだのか」を明らかにすることができた。」 →平均3.2P以上(4段階評定尺度)	3	○ 校内研究では、算数科における学ぶ楽しさを追究した授業研究を全学級で実施し、児童の学ぶ意欲の向上につながった。 △ 学習活動が児童の「わかる・できる」につながっていないことがあった。 △ 発達段階に応じた言語能力について、意図的計画的な指導が不十分であった。 ○ 家庭学習強調週間を中心に、家庭で学ぶ意味や学習内容を継続的に指導したことで、家庭学習が充実してきた。 ○ プロジェクトSEA(海洋教育)では、学年の児童の実態に応じて、活動を工夫することができた。	A	自己評価は適切である。 先生方の努力のおかげで、大きな個人差はないように感じる。 家庭学習強調週間は、子供たちが自分の生活を見直すよい機会となっている。 家庭学習が大切であると思う。さらに充実・向上へ継続指導が必要である。 海洋教育は日々活動が充実し、活性化していると思う。 海洋教育は親も知らないことを一緒に体験したり調べたりしてよかったと思う。 海洋教育で学んだことを下級生に分かりやすく伝えるために考える機会は、それぞれの成長につながっていたと思う。	授業評価・学習者評価を活用し、定期的に指導をふり返り、授業改善のポイントを絞って重点的に取り組む。 週指導計画を活用し、単元で育てる資質・能力を見通し、1単位時間のねらいを明確にした学習を行い子供たちの「分かった。できた。」を増やしていく授業を展開していく。 家庭学習については、その目的を教師と児童、保護者に発信して協力を仰ぎながら連携を図っていく。 海洋教育を充実させるため、児童の課題意識や児童の意識の流れを基に「何ができるようにするか。」を大切にしたりカリキュラムの見直しを行う。							
		基礎的基本的な知識・技能の習得を目指した「基礎タイム」を確実に実施し、できることを増やすようにする。	国語科、算数科の単元テストにおいて期待得点に到達する児童の割合 →9割以上						3	全教師による自己評価で、「海洋教育では、ねらいを明確にして活動を位置づけている。」4P中平均3.2P以上。	A	「いいところみつつけ」を学年に応じて系統的に取り組み、友達に対する見方・考え方を広げていく。 「挨拶・返事・整理整頓」について日常的に賞賛する機会を各学級で位置づける。 学級活動や道徳の学習において、挨拶の価値を体験的に理解できるように関連的指導を行う。			
		自己の課題に応じた家庭学習(予習・復習)を推進する。	家庭学習強調週間の集計において、「自分のめあてで学習することができた。」の質問の達成率85%										4	職員による自己評価: 「課題に粘り強く取り組み、自己調整しながら自力解決するための工夫を行った。」 →平均3.2以上(4段階評定尺度)	A
		プロジェクトSEA(海洋教育)で、自分達の学びを発信し、海との共生やふるさとのまちづくりを考える活動を設定する。	全教師による自己評価で、「友だちの良さをみつけながら、口頭言語を指導する必要がある。」4P中平均3.2P以上。												
	算数科を中心に、意図的に問いを位置づけ、考える楽しさを味わうことができるようにする。	職員による自己評価: 「課題に粘り強く取り組み、自己調整しながら自力解決するための工夫を行った。」 →平均3.2以上(4段階評定尺度)	4	いいところみつつけが日常的になり、児童の肯定的な見方・考え方が多様になってきた。 子供たち同士で見つけたいところについて、教師による価値づけが不十分であった。	A										
	2 心の教育 「やさしい子」の育成 心:相手を推し量り、行動する子ども	掃りの会などでの「友だちのいいところ見つけ」を継続的に行う。				児童による自己評価で、「友だちの良さをみつけながら、口頭言語を指導する必要がある。」4P中平均3.2P以上。(定着率80%)	4	全教師による自己評価で、「子供たちは友達のいいところを見つけている」4P中平均3.2P以上。	3	自己評価は適切である。 子供たちが友達と楽しそうに話している姿を目にすることが多い。優しい子供が多いと感じている。 挨拶がしっかりとできている。 SNSの使い方は家庭・地域・社会を含めてさらに検討が必要だと感じる。 子供同士の会話での言葉遣いがよくなっていると感じることがある。	「いいところみつつけ」を学年に応じて系統的に取り組み、友達に対する見方・考え方を広げていく。 「挨拶・返事・整理整頓」について日常的に賞賛する機会を各学級で位置づける。 学級活動や道徳の学習において、挨拶の価値を体験的に理解できるように関連的指導を行う。				
		日常的に挨拶・返事指導を行う。(重点期間:年3回) 児童会による挨拶運動を行う。	全教師による自己評価で、「子供たちは友達のいいところを見つけている」4P中平均3.2P以上。	3	全教師による自己評価で、「子供たちは整理整頓が身についている」4P中平均3.2P以上。	3									
		身の回りの整理整頓の指導を徹底する。(はきものそろえ・机や棚の整理)	全教師による自己評価で、「子供たちは友達のいいところを見つけている」4P中平均3.2P以上。									3	いいところみつつけが日常的になり、児童の肯定的な見方・考え方が多様になってきた。 子供たち同士で見つけたいところについて、教師による価値づけが不十分であった。	A	
	3 体力向上 「たくましい子」の育成 体:目標を持って運動し、体調を整える子ども	年間を通して、外遊びを奨励する。	全教師による自己評価で、「子供たちは外で遊んでいる」4P中平均3.2P以上。(達成率80%)	3	児童による自己評価で、「目標をもって運動に挑戦している」4P中平均3.2P以上。(定着率80%)	3	自己評価は適切である。 休み時間や放課後により校庭で元気に遊ぶ姿をみる。しかし、メンバーが同じだと感じている。 運動嫌いを減らし、それぞれの個性を伸ばしてほしい。 不得意との向き合い方を指導してほしい。	外遊びの推奨とともに、「縦割り遊び」を位置づけ、群れて遊ぶ楽しさを味わわせ、誰でも楽しく遊べる児童を育てる。 体力向上については、運動の特性を明確にした場づくりを行い、運動量の確保と運動の楽しさを味わわせる授業づくりに努める。 いろいろな技や動きを紹介する「チャレンジ○○(鉄棒)」などを提示し、積極的に体を動かす機会を増やしていく。							
		オリ・パラ教育では、挑戦する大切さを重点とし、運動量を確保した体育の授業を行い、児童のできることを増やす。	児童による自己評価で、「目標をもって運動に挑戦している」4P中平均3.2P以上。(定着率80%)						4	目標を持ち、なわとび検定や持久走に取り組み期間を設定する。	4				
		体力向上をめざし、なわとび検定や持久走に取り組み期間を設定する。	目標を持ち、なわとび検定や持久走に取り組み期間を設定する。									4	いいところみつつけが日常的になり、児童の肯定的な見方・考え方が多様になってきた。 子供たち同士で見つけたいところについて、教師による価値づけが不十分であった。	A	
	いじめ防止	全ての学級で「いいところみつつけ」を実施し、肯定的な見方と自己肯定感を育む。	児童による自己評価で、「友だちの良さをみつけながら、口頭言語を指導する必要がある。」4P中平均3.2P以上。(定着率80%)	4	児童による自己評価で、「友だちは自分のよさを見つけてくれる」4P中平均3.2P以上。(定着率80%)	3	自己評価は適切である。 考え方が多様で家庭との関係を作っていくのは難しいと思うが、システム作りができればよいと思う。 小さな芽を一つでも多く摘み取っていくことは大切だと思う。声なき声に耳を傾けていける環境作りを期待したい。	いじめカルテを活用し、児童の様子を複数の職員で観察し、子供たちや保護者からの情報を細やかに共有し、いじめ見逃し0を継続していく。 オンラインの活用や相談機会の設定をしながら、保護者が相談しやすい環境を整える。							
生活アンケートの実施(5, 9, 1月)し、アンケートを基に面談を実施する。 児童理解会議(毎月第4金曜)の中で、いじめの未然防止について協議する。		児童による自己評価で、「友だちは自分のよさを見つけてくれる」4P中平均3.2P以上。(定着率80%)	3						いいところみつつけが日常的になり、児童の肯定的な見方・考え方が多様になってきた。 子供たち同士で見つけたいところについて、教師による価値づけが不十分であった。	3					
不登校防止	福岡アクション3による不登校未然防止のアクションの確実な実施。 8日以上欠席児童へのマンツーマン対応等、きめ細かな対応の組織的、関係機関との連携、継続的な実施。	不登校傾向児童数の減少 →前年度比:20%減少 8日以上欠席児童に対する支援チーム体制の整備 →整備率:100%		2	集団になじめなかつたり折り合いをつけられなかつたりする児童が増え、効果的な対応が十分ではなかった。 SCやSSW、関係機関と連携して支援チームを整え、個に応じて対応したため、改善がみられた。	4	自己評価は上方修正すべきである。 不登校傾向児童への対応はともよい。 学校だけの問題ではなく、関係機関との連携を強化してほしい。 緻密な対応の継続で減少に努めてほしい。	不登校の多様な要因に対応できるよう、講師を招いての研修を実施する。 欠席が増えた児童や気になる児童については、児童の思いに寄り添い、SCやSSW、教育相談等と連携し、組織的に不登校対応を行っていく							
	週に1回、全職員(水曜日)及び個人や同学年の定時退校日を実施する。 学校閉庁時刻を19時に設定する。	時間外勤務月45時間以上を0人にする。	2						学校閉庁時刻を意識しながら、勤務する職員が増えてきた。時間外勤務時間が昨年度から比較すると11%削減できている。 職員によって業務量の差があり、時間外勤務が増える傾向にある。	2	自己評価は適切である。 学校閉庁時刻の取組はよいと思う。 職員のアンケートなどを行い、原因と対策が必要である。	タイムマネジメント研修を位置づけ、ライフワークバランスに努める。 働き方アンケートを実施し、全職員が自己の課題を明確にし、改善に努める。			

◇ 評価について 【自己評価】 4:目標達成(90%以上) 3:ほぼ達成(70%~90%) 2:もう少し(60%~70%) 1:できていない(60%未満)

【学校関係者評価】 A:自己評価は妥当である B:自己評価は上方修正すべきである C:自己評価は下方修正すべきである